

# PICK UP MOVIE

## 『フード・インク ポスト・コロナ』

[2023年/アメリカ/英語/94分]

提供：パーティシパント&リバーロード

製作・監督：ロバート・ケナー、メリッサ・ロブレド

12/20~

### 食と戦争の関係 を考えてみる



資本主義社会は行き詰っている、との声をよく耳にする。貧富の格差は広がる一方。過剰生産の手っ取り早い処理法としての戦争は、止められそうにない。この言説は正しいかも知れない、と感じさせられることが多い昨今だ。

私たちの生活に不可欠な食べ物にも、同様の問題が深刻な影を落としている。本作「フード・インク」（食品企業）には、冒頭からアメリカの小さい町が次々に映し出される。畑、牧畜場、海などで、低賃金の重労働で生の食べ物をつくりだす労働者の姿だ。だが彼らの多くが、まともな食べ物を口にすることができない。なぜなのか？

アメリカでは近年、企業の買収や合併によって巨大食品企業の寡占化が進んだ。そうなる野菜も肉も魚も、企業側が価格を決めてしまう。生産者は、企業の言いなりに生産せざるを得なくなる。牧畜業では、効率重視で牛や豚が物のように扱われる。売れる商品だけを効率よく栽培する広大な農地は、土壌を疲弊させる。そのうえ巨大食品企業を末端で支えているのも、やはり低賃金労働者だ。ファストフード店や食品工場を3つかけもちで働いても、十分な食費さえ稼げず、子供には超加工食品しか与えられない。

では超加工食品とは何か？ 近年急増している超加工食品は、人口脂、人工甘味料、合成香料などを調合している。大量生産のスナックなどに含まれるこれらの化学物質は、中毒性があるためクセになって食べ続けてしまう。企業にとっては収益性が高いが、健康被害は深刻だ。アメリカではここ10年間で、貧困層の子供の糖尿病発症率が2倍になった。

巨大企業に握られている食品の循環システムを、何とか変えようと努力する人々も描かれている。彼らは仕事に対する誇りを取り戻すと同時に、土や水をこれ以上汚染せず地球環境を保全しようとの意欲もさかんだ。奴隷労働にも等しかった農場労働者や、食品産業で働く低賃金労働者は、労使関係改善のための行動を起こした。

超加工食品の消費量はアメリカが突出して高いという。しかし食品添加物の規制が緩い日本の実状はどうだろう？ 巨大食品企業は多国籍企業で、進出できそうな国を虎視眈々と狙っているから油断は禁物だ。この映画では、ブラジルでの健全な食を取り戻す試みが紹介されている。そのさまを見ると、まともな食べ物を取り戻すことは、戦争を止める道へとつながると思わされる。経済システムは身近な食べ物から戦争までつながっているのだから。

プロフィール

### 田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。